1．京田辺市田辺遺跡の古墳出現期木棺墓

池田　野々花

1．はじめに

田辺遺跡は京都府京田辺市田辺に所在する弥生時代から近世までの複合遺跡であり、遺跡の南に位置する丘陵には中世の山城である田辺城跡が存在する（図１）。1984 年、田辺中央体育館の建設に伴って田辺遺跡と一部重複する田辺城跡の発掘調査がおこなわれ、鉄剣を副葬した弥生時代の木棺墓が発見された（田辺町教育委員会 1984b）。畿内地域で弥生時代の墳墓から鉄剣が出土することは稀であり、出土当初から注目を集めていたが、報告書が刊行されておらず、詳細については不明であった。今回、京田辺市史編さん事業の一環で出土遺物や発掘当時の図面などの調査をおこなう機会をえたので、その調査成果を報告する。

2．田辺遺跡の概要

田辺遺跡は 1981 年の田辺町教育委員会による分布調査によりその所在が確認され（田辺町教育委員会 1982）、その後、田辺町庁舎と田辺中央体育館の建設に伴って発掘調査がおこなわれた。第１次調査（試掘）が 1983 年８月 19 日～ 10 月 22 日、第２次調査が 1984 年５月６日～７月 31 日に実施され、古墳時代～近世の遺構がみつかり、奈良時代の土壙墓からは緑釉陶器四足壺が出土して注目を集めた（田辺町教育委員会 1984a）。つづく 1984 年８月１日～ 10 月 20 日には、田辺城跡の調査として田辺遺跡と重複している箇所の発掘調査がおこなわれ、田辺城が 16 世紀後半の山城であることが確認されたほか、下層から弥生時代の木棺墓や甕棺墓が検出された（田辺町教育委員会 1984b）。

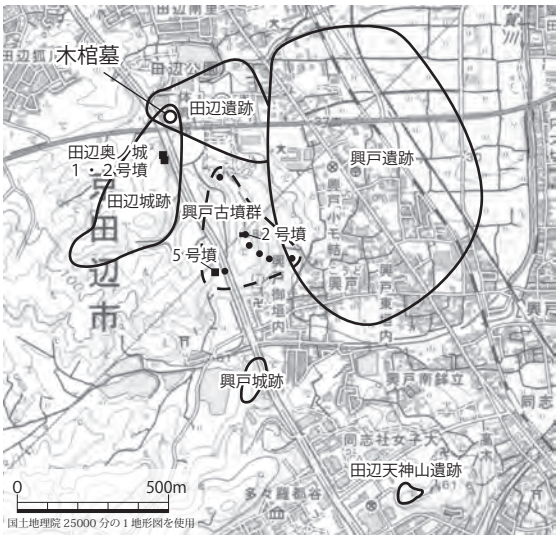

図１　田辺遺跡とその周辺遺跡

また、田辺城跡の 1996 年度の調査においては、田辺遺跡から約 200m 南方の地点で弥生時代中期の方形周溝墓と竪穴建物跡、古墳時代中期の田辺奥ノ城古墳群が確認されている（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997）。

今回報告する弥生木棺墓は南からのびる標高約 70m の丘陵の尾根先端の中腹部に位置する。現地説明会資料によると丘陵の先端部には上下２つの平坦面があり（図２）、それぞれに調査区を設置したところ、そのうち、下段平坦面に設けられた第２調査区から「弥生時代後期」の「方形台状墓」が検出され、墓壙内からは鉄剣、「墓壙の上」には土器が置かれていたと報告さ

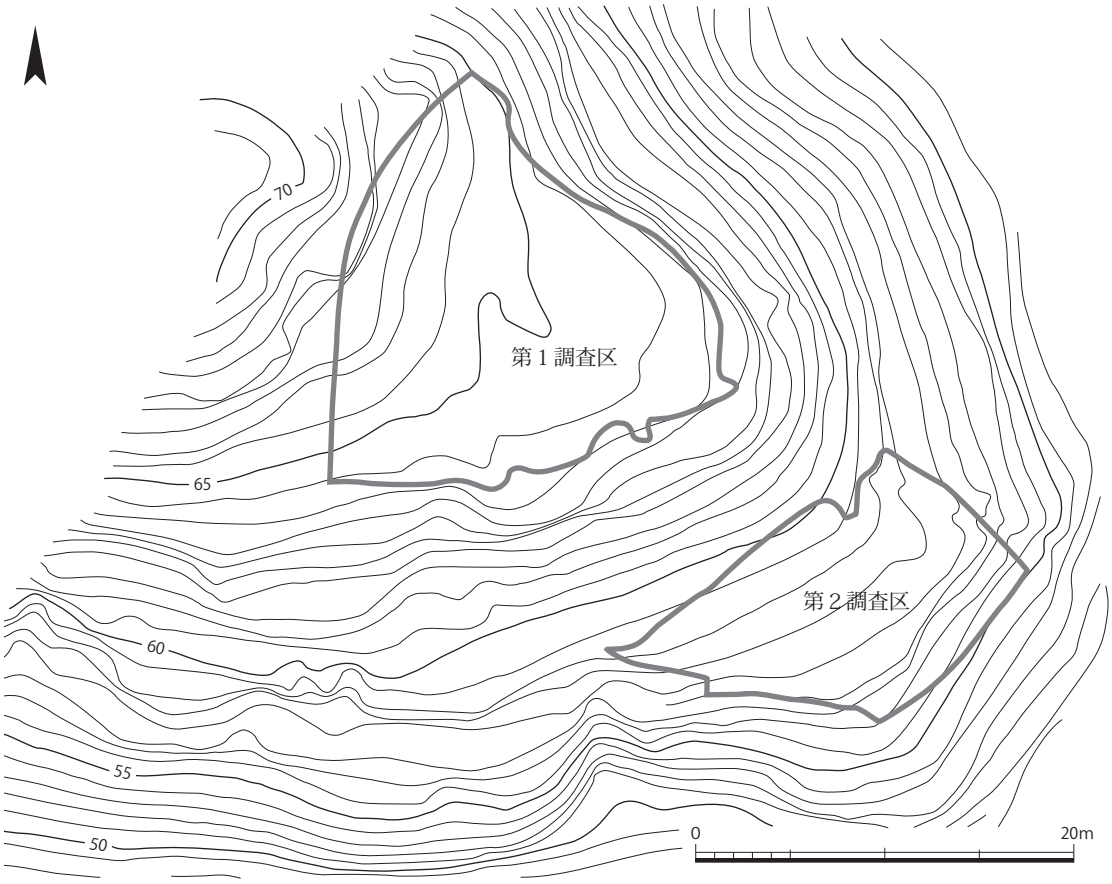

図２　第３次調査地地形図（S=1/400）

れており、同じ第２調査区内からは「甕棺」もみつかったことが記載されている（田辺町教育委員会 1984b）。また、調査終了後の 1985 年３月には工事の際に新たに木棺墓がみつかり立会調査がおこなわれている[1)]。なお、本「方形台状墓」の時期についてはその後、田辺町教育委員会による興戸遺跡第９次発掘調査の報告書で、「弥生時代後期終末ないし庄内期」に改められているが、変更の理由などについては触れられていない。（田辺町教育委員会 1992）。

３．遺構

本稿では、現地説明会資料で「方形台状墓」とされている遺構について、後述の通り、墳丘構造を明確には言及できないため、「木棺墓１」と呼称する。また、立会調査で確認された遺構についても同じく「木棺墓２」[2)]とする。

（１）木棺墓１（図３）

墓壙は検出面で平面が長方形を、横断面は逆台形を呈しており、主軸は北西－南東方向で、全長 4.3m、幅 2.3m、深さ 1.3m をはかる（図 3-①）[3)]。床面には木棺の痕跡がみられる。墳丘については、墳丘断面図（図 3-③）をみると、第５・６・７層が盛土とみられ、特に第７層は「縞層が入る」という記述があることから墳丘が存在すると考えられるが、等高線図（図 3-①）からは明確な墳裾は確認できない。下段平坦面のほぼ全域が第２調査区になっているため、墳丘は大きくても一辺または直径が約 12m におさまるであろう。出土遺物は鉄剣と加飾

二重口縁壺があり、鉄剣は床面から出土している（図 3-②）。加飾二重口縁壺の出土状況図はないが、ほとんどの破片の注記に木棺墓 1 の発掘調査時の名称である「SK03」または「SX03」と記されており、墓壙の中から出土していることがうかがえる。

（2）木棺墓２（図４）

木棺墓 1 から約 18m 南方の地点で検出された（図 4）。墓壙は検出面で全長 3.4m、幅 1.5m、深さ 1.3m をはかる。正確な位置は不明であるが、木棺墓 1 との標高差が 1 m ほどしかないため、木棺墓 1 と同じ下段平坦面にあったと考えられる。緊急の立会調査であったために詳細な図面・記録が残っておらず、墳丘や溝の有無は不明である。墓壙床面から鉄剣、鉄鏃、鉇、鉄鎌が出土しているものの土器の出土はなかった[4)]。

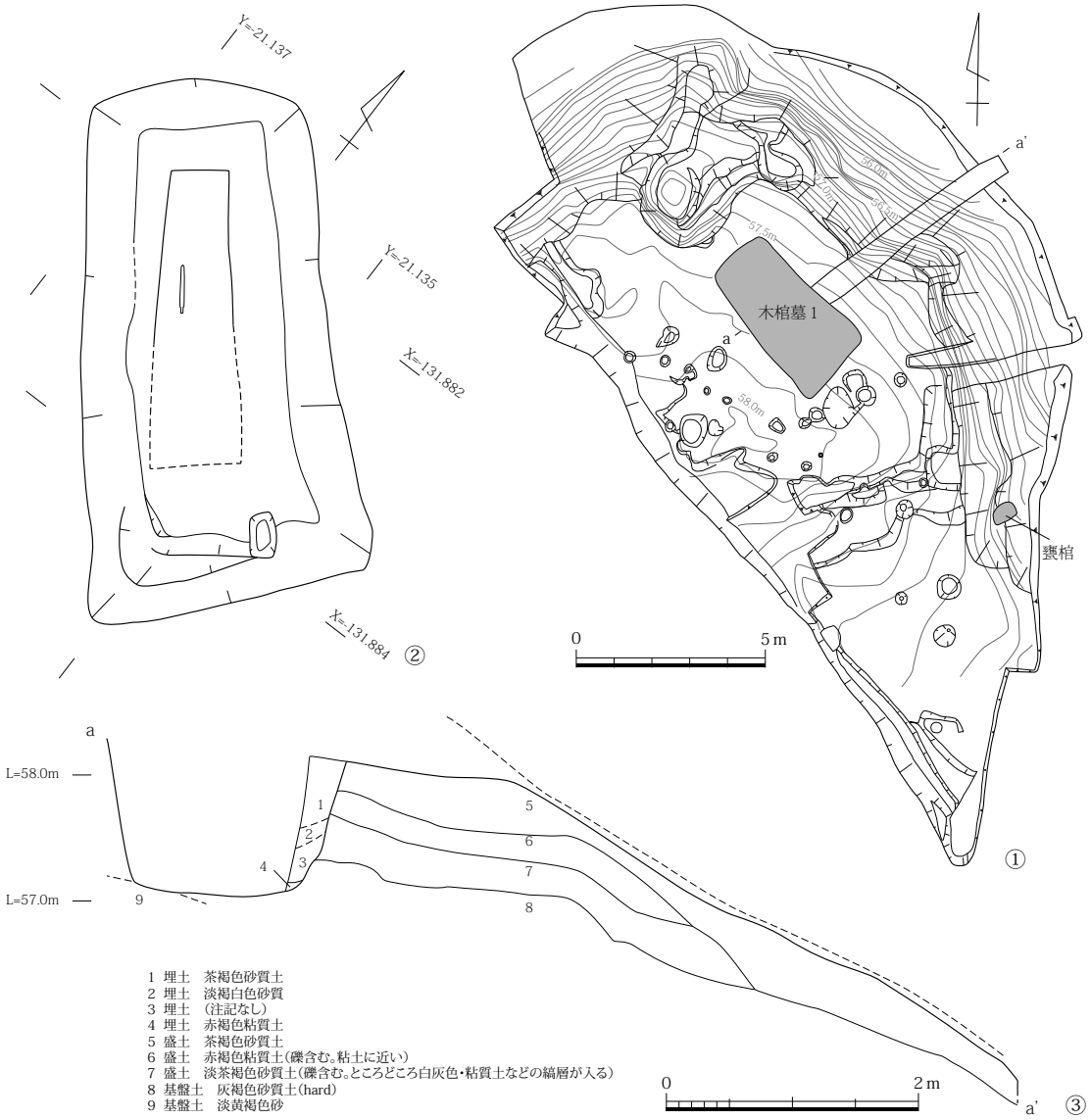

図３　第２調査区平面図と木棺墓１遺構図（①：S=1/200、②・③：S=1/60）

（3）甕棺墓（写真１）

木棺墓１から約５ｍ南東の斜面から出土した（図 3-①）。墓壙の長軸は 0.7m である。一方の甕の口縁を打ち割り、もう一方の甕と組み合わせて埋納されていた。ほかの遺物は出土していない。

４．遺物

（1）木棺墓１出土遺物（図 5･6）

土器　土器はほとんどが加飾二重口縁壺であり、他は小片で器種の特定が難しい。加飾二重口縁壺は胎土や文様の位置などから少なくとも３個体はあったと考えられる。１は口縁部で、口径は 23.6cm をはかる。内面に３条の櫛描波状文を施している。口縁端部は外面を拡張しており、下部に粘土を貼り付けて垂下させた痕跡がみられる。口縁端部外面に櫛描波状文を、頂部には刺突文を施している。また、口縁外面下部に小さな突帯を取り付けており、ナデ調整が確認できる。２は頸部である。胎土や焼成は１と似ており、同一個体の可能性がある。屈

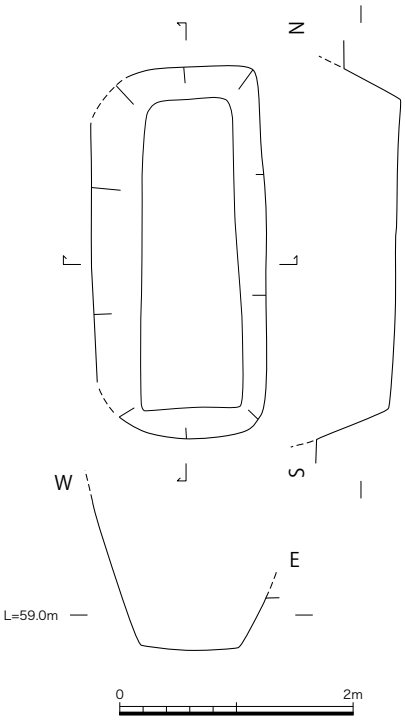

図４　木棺墓２遺構図（S=1/60）

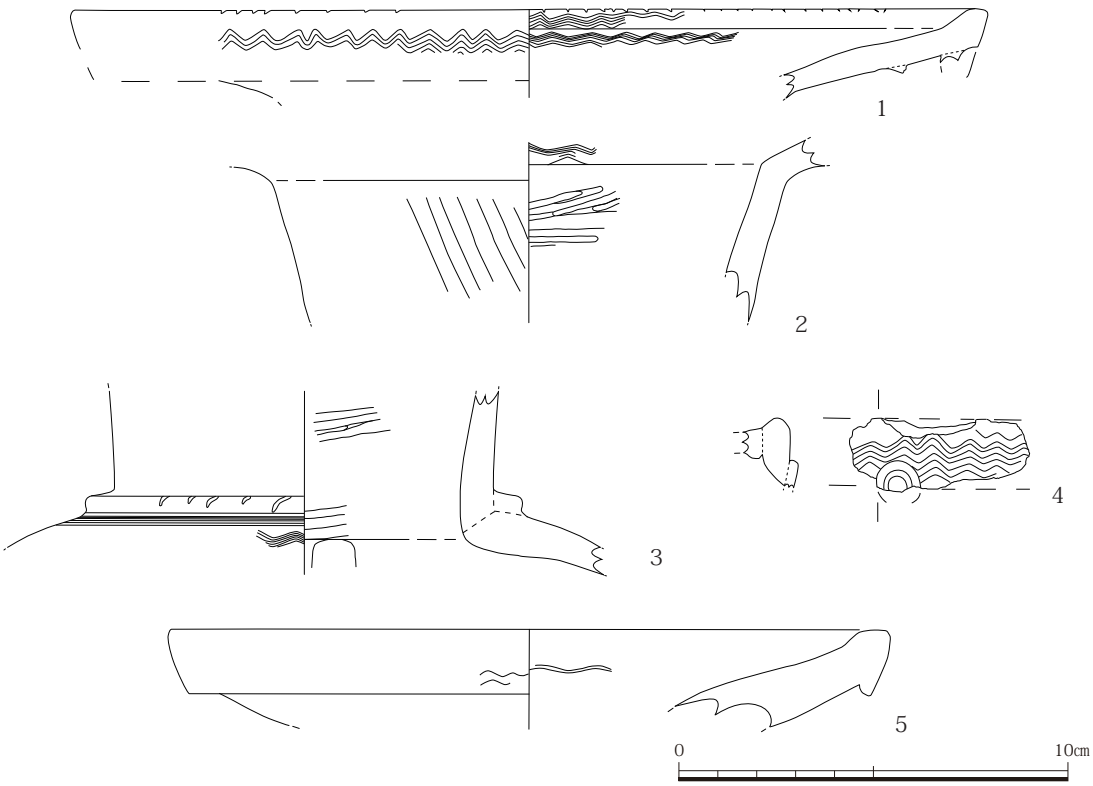

図５　木棺墓１出土土器（S=1/2）

曲部内面の波状文以外に文様はなく、外面はタテミガキ調整、内面はヨコミガキ調整で両者ともややナナメ方向になっている。３は頸部である。突帯には刺突文が施され、僅かに残る胴部には櫛描直線文や櫛描波状文が施文されている。外面はナデ調整、内面にはヨコミガキ調整が見られる。焼成はほかの資料と比べ良好である。４は口縁端部である。粘土を貼り付けて外面を拡張しており、その外面には波状文を施し、さらに円形竹管浮文をつける。内面はナデ調整がみられ、施文はされていない。焼成や胎土は１や２と似ているが、口縁端部の製作方法や口縁部内面の文様の有無から、少なくとも１とは別個体とみられる。５は木棺墓１の墓壙内から出土したものではないが、第２調査区内で出土した資料であり、木棺墓１に伴う可能性が高いため報告する。表面の残存状況がよくないが、加飾二重口縁壺の口縁部で、口径は 18.6cm をはかる。口縁端部に粘土を貼り付けて外面を拡張している。内面の中ほどには緩やかな波状文を施している。器壁が他のものよりも厚く、焼成も比較的良好である。

これらの土器については、木棺墓１のどこから出土したかなどの詳しい出土状況が不明であるが、残存状況が良好でないことから、墓壙の中ではなく墳丘の上に並べられていた可能性が高い。

鉄器　　鉄剣が１点出土している。全長 37.7cm、身部長 32.7cm、身部幅 3.1cm、茎部長 5.0cm、茎部幅 2.3cm、刃部厚 0.7cm、茎部厚 0.7cm、重さ 248.3g をはかる。木棺墓１の床面から墓壙の長軸に沿った状態で発見された。刃部の最も厚い部分と茎の厚さはほとんど変わらない。茎部の中ほどには目釘孔が一つある。関には刃関双孔は確認できなかった。

（２）木棺墓２出土遺物（図７）

鉄剣１点、鉇１点、鉄鎌２点、不明鉄製品１点が出土している。

１は鉄剣で残存長 13.3cm、身部長 10.6cm、幅 2.3cm、厚さ 0.2cm、重さ 32.8g をはかる。かなり薄手であり、断面形は扁平な凸レンズ形をしている。関の形状は斜関で、茎部には目釘孔が確認できた。２は鉄鉇で残存長 7.5cm、刃部幅 1.3cm、茎部幅 1.0cm、厚さ 0.3cm、重さ 10.1g をはかる。刃部には裏すきがあり、刃部は身部に比べて幅がやや大きくなっているが関は明確でない。木質は認められなかった。屈曲はやや弱い。茎の断面は長方形である。鉄鎌は２点出土している。３は残存長 7.3cm、幅 2.4cm、厚さ 0.3cm、重さ 23.9g をはかる直刃鎌である。基部は欠損している。先端がやや上向きに反り、幅がやや狭くなる。４は残存長 8.51cm、幅 1.6cm、厚さ 0.2cm、重さ 19.1g をはかる。こちらも基部は欠損している。中央部から左側は形状も上向きに沿っている点は似ているが、３に比べて幅が小さい。２点とも木質が付着しているが、柄など使用時に伴うものとは考えにくく、木棺の板材など埋葬に伴うものであると想定できる。５

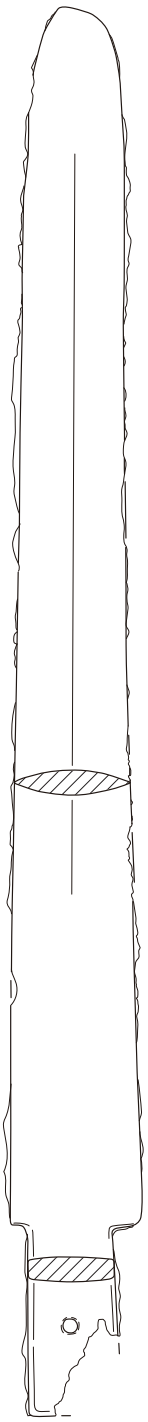

図６　木棺墓１出土鉄器（S ＝ 1/2）

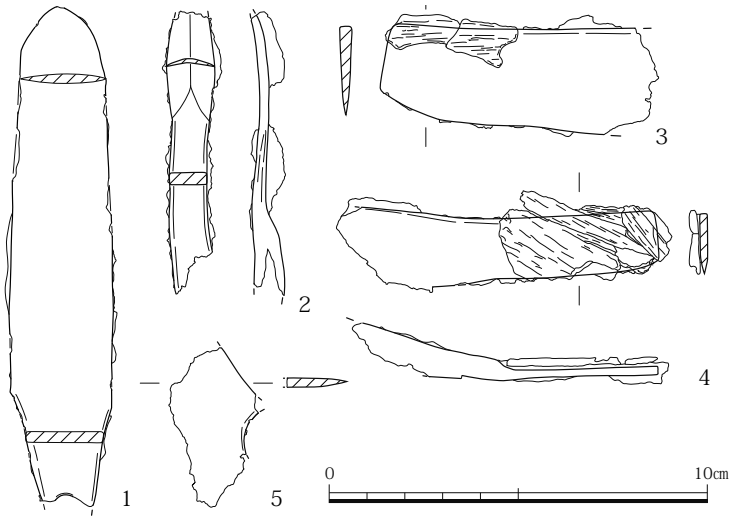

図７　木棺墓２出土鉄器（S=1/2）

は大部分を欠損しているが、一辺のみ刃部が残っており、鉄鏃である可能性が考えられる。残存長 4.2cm、厚さ 0.3cm、重さ 6.4g をはかる。

５．田辺遺跡の古墳出現期木棺墓

（１）木棺墓１について

木棺墓１から出土した加飾二重口縁壺は、庄内式期から布留式期に登場する器種で、河内で登場する器形に東海系の装飾を施した儀礼用の土器と言われており（赤塚 1995）、河内をはじめとした畿内地域を中心に出土する。古墳出現期を代表する器種で、墓の主体部周辺や周溝から複数個体出土することが多く、埴輪の前身と考えられている（廣瀬 2009）。八尾市久宝寺遺跡では方形周溝墓に伴ってたびたび出土しており、城陽市芝ヶ原古墳のような前方後方形の墳墓にも多くみられる。また、墳墓に複数の加飾二重口縁壺が伴う場合は、さまざまな型式の加飾二重口縁壺が使用されている。田辺遺跡木棺墓１で出土した加飾二重口縁壺は、口縁端部を、粘土を貼り付けることによって垂下させる長友朋子分類のＢ２類（長友 2014）に該当するものしかみられないが、その器壁の厚さや文様は統一されておらず、ほかの出土例と違わない。このような口縁形態をもつ加飾二重口縁壺は、庄内式新段階から布留式最古段階に位置づけられている（長友 2014）。

次に鉄剣についてみると、剣身が 20cm 以上 35cm 未満で茎が 7 cm 未満とする杉山和徳分類のⅡ - ２型短剣に該当し、弥生時代後期後半に出現し終末期に盛行するとされる（杉山 2015）。畿内地域における弥生時代終末期から古墳時代初頭の鉄剣の出土例は大阪府崇禅寺遺跡、中宮ドンパ遺跡、奈良県見田・大沢遺跡など数が少ない上に、河内、大和に限られ、山城地域では田辺遺跡木棺墓 1･2 のみである。

以上をまとめると、木棺墓１から出土した遺物は弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置づけることが可能である。当該期は庄内式土器や大規模な墳丘墓といった古墳を構成する要素が登場する時期であり、古墳の出現期であると考えられている。木棺墓１からは加飾二重口縁壺

や鉄剣が出土しており、河内・大和地域との強い関わりが想定できる。

（2）木棺墓２について

木棺墓２からは鉄器しか出土していないが、器種の多いことが特筆される。鉇は弥生時代中期から副葬品の中にしばしばみられる器種で、古墳時代に柄が長大化することは以前から指摘されている（川越 1993）。本例は途中が欠損しているものの、全体的に薄く反りも弱めで弥生時代の鉇に近い特徴をもっている。一方、鉄剣は剣身が 10cm 以上 20cm 未満で短茎の杉山分類Ⅱ - ３型にあたり、終末期から古墳時代前期にかけてみられる型式である（杉山 2015）。また、直刃鎌が２点出土しているが、弥生時代の鉄鎌は曲刃鎌が多く、古墳時代前期になると直刃鎌が主流になり弥生時代鉄鎌の系譜は途絶えると考えられており（川越 1993）、古墳時代前期的な特徴をもっているといえる。

木棺墓２からは様々な特徴をもつ鉄器が出土しており、まさに過渡的な様相を示している。木棺墓１と同じく古墳出現期の木棺墓と考えてよいだろう。

（3）田辺遺跡の古墳時代出現期木棺墓の位置付け

田辺遺跡と同じ丘陵からのびる別の尾根には弥生時代後期の方形台状墓である興戸５号墳が確認されており（京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997）、他にも周辺では飯岡遺跡や宮ノ下遺跡から弥生時代後期に属する方形周溝墓が検出されている。田辺遺跡の木棺墓１・２はどちらも大きな墳丘はもたなかったとみられ、弥生時代後期に周辺でみられた方形台状墓や方形周溝墓のような形態を引き継いでいた可能性が考えられる。また、終末期になると山城地域では宇治市の若林遺跡で方形周溝墓が、八幡市の幸水遺跡では木棺墓と土坑墓が、城陽市では上大谷 6･7 号墳や芝ヶ原古墳のような墳丘墓が築かれる。木津川の右岸の久津川地域では墳丘墓が取り入れられつつあったが、他の地域では墳丘墓築造がやや遅れていた様子がうかがえる。

その中で、田辺遺跡木棺墓は大規模な墳丘をもたないながらも副葬された鉄器の質は高い。芝ヶ原古墳は複数の石製品、鉄器が出土しているが、鉄剣は副葬されていない[5]（城陽市教育委員会 2014）。田辺遺跡の南方にある、弥生時代後期～終末期の田辺天神山遺跡では鉄器が多く出土していることも踏まえると（森編 1976）、大規模首長墳をつくるような集団ではないが、鉄器の入手に長けた集団であった可能性を想定できる。加飾二重口縁壺の存在は鉄器の流通ルートに河内や大和が深く関わっていることを示唆しているのではないだろうか。

６．おわりに

以上、田辺遺跡の木棺墓について遺構と遺物を紹介しながら、その位置づけをおこなってきた。発掘当初には弥生時代後期とされていた田辺遺跡の木棺墓であるが、土器と鉄器、両方の遺物から弥生終末期～古墳時代初頭という古墳出現期のものであることが明らかとなった。木棺墓２も副葬鉄器は弥生時代から古墳時代への過渡期的な様相を示しており、木棺墓１と時期的に近いものと考えられる。田辺遺跡の木棺墓は、墳丘構造は伝統的な弥生文化を引き継ぎながらも、供献・副葬された土器や鉄器は最先端のものである。両者のちぐはぐな状況は、弥生時代から古墳時代への社会変革の複雑な様相を表しているのであろう。

謝辞

本調査の実施や成果の公表にあたっては、京田辺市文化・スポーツ振興課及び同課の上野あさひ氏、奈良文化財研究所及び同所の栗山雅夫氏、田村朋美氏、廣瀬覚氏、京都大学大学院の繰納民之氏、元京田辺市職員の鷹野一太郎氏に大変お世話になった。末筆ながらここに感謝の意を表したい。

註

1）実測図の作成日と鷹野一太郎氏（元京田辺市職員）のご教示による。

2）遺構図は京田辺市に保管されている発掘当時に作成されたものをトレースし、一部筆者が加筆・変更をおこなっている。

3）上段平坦面はおおよそ標高 64 ～ 68m、下段平坦面はおおよそ標高 56 ～ 60m の地点に位置する。

4）鷹野一太郎氏のご教示による。立会調査は本調査終了後であったため、現地説明会資料でも報告がおこなわれていない未報告資料である。

5）鉄鏃と大型の鉇、漁具片が出土している。

参考文献

赤塚次郎 1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7 号　考古学フォーラム

川越哲志 1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣

京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997「府道八幡木津バイパス関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 77 冊

城陽市教育委員会 2014『城陽市埋蔵文化財調査報告書―芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書―』第 68 集

杉山和徳 2015「日本列島における鉄剣の出現とその系譜」『考古学研究』第 61 巻第 4 号　考古学研究会

田辺町教育委員会 1984a「田辺遺跡現地説明会資料」

田辺町教育委員会 1984b「田辺遺跡・城跡現地説明会資料」

田辺町教育委員会 1993『飯岡遺跡第 4 次発掘調査概報』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第 16 集）

長友朋子 2014「芝ヶ原古墳出土土器の位置づけ」『城陽市埋蔵文化財調査報告書―芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書―』第 68 集　城陽市教育委員会

廣瀬覚 2009「埴輪の成立過程をめぐる諸問題―特殊器台・特殊壺・加飾壺―」『ヒストリア』218 号　大阪歴史学会

森浩一編 1976『田辺天神山弥生遺跡』同志社

写真１　甕棺

写真２　木棺墓１出土鉄器

写真３　木棺墓２出土鉄器

編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱いは、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。（う）

京都府立大学文学部歴史学科
フィールド調査集報　第９号

編集・発行　京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
発　行　日　2023 年 3 月 30 日
印　　刷　株式会社 北斗プリント社
〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町 38-2